

＜小特集：反出生主義＞

## 無生殖協会の目指すもの

本当に“善い”反出生主義に向けて

古野裕一・穂積浅葱(ともに無生殖協会共同代表)\*

インタビュアー: 森岡正博

——お二人は、日本初の反出生主義・反生殖主義の活動団体「無生殖協会」を2021年1月に設立されたわけですが、その経緯はどのようなものだったのでしょうか？

**古野** 反出生主義が広まるにつれて SNS 等で反出生主義を標榜しながら差別的な言動をする者が目立って見られるようになり、反出生主義がそうした差別的で非倫理的な言動をするような思想であると内外に混同されるのを防ぐために、無差別的で倫理的な反出生主義を無生殖主義と新たに名付け、その普及のために無生殖協会を設立しました。

**穂積** マスメディアが反出生主義を認知し始めたことも設立の背景にあります。反出生主義について記事を書きたいと思う時、彼らが話を聞きに行くのが反出生主義を掲げる Twitter ユーザーたちではなく大学教授、とりわけ著書で反出生主義を扱っていらっしゃる森岡先生になるのは当然です。ところが森岡先生の研究対象としての反出生主義は、我々のような既存の反出生主義者／antinatalists の多くが掲げるそれとは異なり、反生殖主義的な出産否定に加えて誕生否定というものを含んでいます。この反出生主義と我々の掲げる反出生主義が同じ名前を持っていることは、反出生主義を実践するヒトを増やして苦痛を最小化することを目指す我々にとって大問題です。このままではメディアが反出生主義を取り上げるたびに誕生否定としての反出生主義が大衆に知られるようになり、「メンヘラ思想を押し付けるな」「勝手に自殺してろ」などと大衆の反発を招いて我々の活動が難しくなるだけだと危惧しました。それでも森岡先生に「誕生否定は反出生主義から撤退して別の名前を使え」などと立ち退きを求めることは現実的ではありませんから、我々の方が新たな名前を使って純粋な出産否定としての反出生主義、すなわち無生殖主義を啓発することに集

---

\* 古野裕一の Twitter アカウント：<https://twitter.com/hurunoYuuichi>  
穂積浅葱のウェブサイト：<https://asagi-hozumi.jimdofree.com/>

中してみよう、という試みとして設立に踏み切りました。

——たいへん良く理解できました。無生殖協会が、人々にもっとも伝えたいメッセージは何でしょうか？

**古野** 現代に至るまで生殖や生命は無条件によいものだと多くの人が考えてきたと思います。しかし、よくよくそれらの行為や現象を多角的に眺めてみると必ずしもそれらは諸手を挙げて賛成出来るというものでもなく、無視出来ない深刻な問題が多数内包されていることに気付くはずでです。無生殖主義は、そうした問題の解決のための方法やそれらについて考える機会を提供します。人々には是非とも無生殖主義について積極的に議論し、生殖や生命が抱える問題の解決を試み、より良い世界の実現を目指していただきたく思います。

——無生殖協会が目指しているのは、すべての人間が子どもを産むのをやめて、人類が絶滅することだと考えてよいのでしょうか？

**古野** 必ずしも人類が絶滅すれば終わりというものではなく、人類以外の苦痛を感じる全ての存在の苦痛を将来に亘って減らすために産まないことを基本にしつつも、あらゆることを考慮して宇宙を含めた世界全体の苦痛を減らすことを目的にしています。

——ただ、その考え方を多くの日本の人々に理解してもらい、賛同してもらうにはとても大きな困難が待ち受けているように思えます。人間が子どもを産んで、社会を存続させていくのは当然のことだという考え方は、非常に根強いのです。そのような一般の人々を説得していくための、何か具体的な案はお持ちでしょうか？

**古野** まずは無生殖主義の考えや理念を知ってもらい、生殖をすることの問題点を理解してもらって子どもを産まない人生のあり方や養子縁組や里親制度を充実させたりしながら、生殖をするのが当たり前といった価値観を変えていきたいと思っています。

**穂積** 今しているようにソーシャルメディアで発信するだけでは、我々のメッセージは無生殖／反出生主義に関心のある人々にしか届きません。人々がそれぞれ持っている関心分野などに関係なく「無生殖協会」「無生殖主義」という文字列が人々の目に入るように、マスメディアに取り上げられたり、街頭に出

て呼びかけたりすることも必要です。また、大衆が楽しむエンターテインメント——映画、音楽、文学など——を通して啓発活動に貢献しようとする人を支援することも有効な手段になり得るでしょう。このような施策を容易にする効率的な方法として、有力なインフルエンサーを味方につけることができればなお良いと思います。

——無生殖協会は、人間が子どもを産まないことだけではなく、家畜制度と肉食を全廃することも目指していますね。反出生主義者はヴィーガンになるべきであると主張されていますが、それはなぜでしょうか？

**古野** 苦痛を感じるのは人間だけではなく、人間以外の動物にも当てはまりません。反出生主義は、生まれる存在の苦痛に配慮して生殖をすべきではないという思想なので、当然のことながら人間以外の動物についても生殖によって苦しむことがないようにそれらの生殖に加担する行為は慎まなければなりません。

**穂積** (反生殖主義としての) 反出生主義の適用範囲をホモ・サピエンスという霊長類の一種に限定する合理的な理由はありません。反出生主義の根拠は苦痛という主観的経験の質が持つ悪性であって、ヒトの持つ言語能力や理性などではないからです。このように反出生主義を最も純粋な「反苦痛主義」(painismと言った方がいいでしょうか) のように実践してみれば、それは自動的にヴィーガニズムの実践に繋がります。

——私は大学の授業で肉食の是非についての講義をすることもありますが、若い学生たちはヴェジタリアンやヴィーガンに対して強い拒否感を抱いています。そういう人たちは勝手にそうすればいいだけで、自分たちに押しつけないでほしいと主張します。彼らにはどうやって声をかけていきますか？

**古野** 肉食は個人の自由ではなく、肉食をすることで動物に多大な苦痛を押し付けているのは肉食をする側であって、自分が食べられる動物の立場になればそのような言い訳は通用しないことを自覚してもらい、ヴィーガニズムを実行するように説得します。

**穂積** ギャングに金を払ってヒトを拷問してもらうことが「個人の自由」として正当化されないことに同意する人は多いでしょう。肉食を続けることは、家畜に同じことが起きることを容認するということです。同じ有感生物なのにこれほどまでに扱い方が違うのは、人々がヒトとそれ以外の動物を無自覚に差別

していることの表れなのではないでしょうか。上で述べたように、他者に配慮する理由は苦痛であって知能ではないはずです。なぜあなたがペットのイヌを踏みつけないように配慮するのか考えてみてください、と促せば分かってもらえるでしょうか。

——SNS を中心に、反出生主義に共感する人々の声が出始めました。日本の反出生主義の現状について、どのように思っていますか？

**古野** 確かに SNS を中心に共感する声が出始めてきたことは私たちも実感していますが、SNS 以外の実社会に於いては反出生主義自体を知らない人が殆どですし、現状の SNS での反出生主義を標榜する者の中には差別的な言動をする人も多いので、今後はネットや実社会の両方に差別的でない倫理的な反出生主義である無生殖主義が広まってほしいです。

——SNS とくにツイッターを見ると、反出生主義者とそうでない者のあいだ、そして反出生主義者の内部で、喧嘩に近い応酬がなされているのをよく見ます。その原因はどこにあるのでしょうか？ そのような攻撃的な言葉を書く人々について何かおっしゃりたいことはありますか？

**古野** 反出生主義も出生主義もその人の人生観や根幹に関わる思想ですので必然的に対立が起きやすいのだと思います。そのような攻撃的な言葉を書く人にはそうした行動自体が世の中の苦痛を増やしますし普及という観点からも余り効果的ではなく、また反出生主義に対する誤解も招きますのでそうした行動は慎んでほしいと思っています。

**穂積** 反生殖主義としての反出生主義を支持するのであれば、その支持を広げるために最も有効な行動をするように努めなければなりません。反出生主義は「誰にも生殖の自由はない」というものであって、「生殖は個人の自由」とするチャイルドフリーではないからです。“ズレた”理由で反出生主義を支持しているように見える自称反出生主義者を露骨に見下したり反-反出生主義者を罵倒したりすることは、支持拡大の方法として効率的ではないでしょう。喧嘩は反出生主義の実践の仕方として適切ではないと言わなければなりません。

——私が個人的に気になっているのは、女性のリプロダクティブライツとの関係です。フェミニズムは「産む産まないは女性が決める」と主張してきました。これは現代のフェミニストの共通見解だと思います。ところが反生殖主義は、

「女性に産まない権利はあるが産む権利はない」という考え方だと思います。すると女性のリプロダクティブライツと対立してしまいます。この点はどうお考えでしょうか？

**古野** そうしたリプロダクティブライツが子どもの利益を考えた上でそれでもなお自明であるかどうかフェミニストをはじめリプロダクティブライツを支持する方々にはよく考えてほしいと思っています。その決断が子どもの利益に深く関係することとなればやはりそれは産む側の都合のみで決めていいものではないと思います。

——反生殖主義に関心を寄せる女性のなかには、社会からの「子どもを産め」という圧力に抵抗してきた女性や、チャイルドフリーのライフスタイルを模索してきた女性が多くいるように感じます。反生殖主義は、根本では彼女たちとは異なった思想のように思うのですが、それについてはどうお考えですか？

**古野** チャイルドフリーは産むかどうかを決められる側がそうした圧力に反対して自身の生殖の選択の自由を重視するものですので、反生殖主義とは動機が違うわけですが、そうした圧力に反対して産まない選択をしやすくなることは反生殖主義としても大いに歓迎すべきことなので、場合によっては協力することもあると思います。

——人々が持っている反出生主義や反生殖主義への誤解というのも、いろいろあると思います。もちろん、反出生主義者や反生殖主義者の中にもいろんな考え方があって当然ですが、それでもどうしても指摘しておきたい誤解というのは何かあるでしょうか？

**古野** 反出生主義を主張してるのに何故自殺しないのか？という誤解はかなり多く聞きますし、その発言は反出生主義者を傷付けかねないのでこれについては指摘しておきたいです。反出生主義は自殺主義ではなく、最初から生まれないうことと生きている状態から死ぬこととは全く別物であるということを理解してほしいです。

**穂積** とりわけ反出生／反生殖主義を国単位で、または世界的に実践する方法を議論する時にありがちだと思うのですが、外から見ると我々の扱うものが危険思想のように見えてしまうことがあると思います。しかし反出生／反生殖主義は苦痛という主観的経験の質が持つ悪性に基づく反苦痛主義的な思想です

ので、実践にあたって多大な苦痛を生み出す方法を探ることは重大な矛盾となります。危険思想と呼ばれるようなものとは真逆です。

——その点に関連しますが、反出生主義は優生学と誤認されることもありますし、実際にこの二つを区別せずに語っている人を見ることもあります。これについてはどう思われますか？

**古野** 優生学とは明確に区別されるべきです。反出生主義のなかには「前提として誰も生まれるべきではないが、障がい者や貧乏人は特に生まれるべきではない」と主張し、これを優生学ではなく反出生主義として掲げる人がいますが、その主張は言うなれば障がい者や貧乏人以外の出生ならばある程度は許容することを意味します。反出生主義はそうした差別をせずにどんな存在であっても苦痛を感じればそれは反出生の対象となり、許容の余地を残すようなものではないと思います。また、そうした言動をすることで誰かを傷付けたりする問題も考えなければなりません。

——反出生主義者のなかには、医師幫助自殺や安楽死の解禁を訴える方も少なからずおられます。現存する苦痛を減らす目的で、自分で自分のいのちを絶つ決定をするのを許可するべきだという考えです。日本では認められていませんが、外国では認められている国や州があります。難しい論点ですが、この点について、何か思われることはありますか？

**古野** 医師幫助自殺や安楽死は解禁すべきだと思います。自らの意思でなくこの世に生まれて、なおかつ死んでもいいと思うほどの苦痛を抱えているにも関わらず、それをさせないようにするのは余りにも残酷だと思います。自身の明確かつ揺るぎない意思があれば、医師による自殺幫助や安楽死も認めるべきでしょう。

**穂積** 「死ぬ権利」は反出生主義と直接関係するものではありませんが、起きてしまった出生に対する救済措置として当然保障されなければなりません。作られてしまったことを悔やんでいる意識が無痛で救済してもらえるであろう現実的な手段が多く地域で違法とされている現状は、言葉では言い尽くせないほど残酷で野蛮です。「安楽死を合法化すると同調圧力で生きる権利を奪われる人（とりわけ高齢者や障害者）が出てくる」という懸念——この懸念自体はもっともなものだと思います——を理由として合法化に反対する意見がよくありますが、今実際に耐えがたい苦痛を感じていて安楽死を使いたい当事者

が存在するという事実は彼らにとって他人事なのでしょうね。また、健常者と呼ばれる人たちが安楽死議論の“部外者”、“不適格者”と決めつけて排除しようとする人もいます。前述の同調圧力の件に関連して「部外者が口を出して障害者から生きる権利を奪おうとするな」というような主張をする人です。しかし、健常者をこの議論から正当に排除したいのであれば、健常者に苦痛を感じる能力がないことを示さなければなりません。ある者が安楽死を必要とする理由は純粋な苦痛であり、障害は苦痛の原因になり得る事象の一種でしかないからです。安楽死の技術が存在している今、苦痛を感じ得る全ての者がそれを使う権利を認められることは当然です。そう遠くない過去には私も死ぬ権利の行使を望む当事者でしたので、現状には言葉にできないほどの悔しさを感じています。

——反出生主義が活発になったのは、不況や環境破壊など、社会の状況が悪くなったからだという声を聞くことがあります。反出生主義は、きわめて現代的な現象だと考えていいのでしょうか？

**古野** そうした状況よりもベネター氏や森岡先生を初めとした哲学者の方が反出生主義を紹介し、またインターネット、特に SNS の発達によってテレビや新聞等のメディアに載せにくい情報も個人が容易に発信出来るようになったことが大きいと思っています。悲惨な社会状況は近年に限ったことではないですし、それを原因とするのは考えにくいです。

——あと、反出生主義を唱える人はメンタルヘルスに問題があるのだという人もいます。それについてはどうお考えでしょうか？

**古野** そうした傾向があるのは間違っていないと思います。自身のつらい状況から子どもを同じ目に合わせたくないと思えるのは自然なことです。ただ、当然ですが、そうでない人達も沢山いますし、反出生主義は飽くまで思想のひとつなので、病気が原因だからそれが快方に向かえば反出生主義を放棄するだろうなどと考えるのは誤りです。

**穂積** メンタルヘルスに問題があることが反出生主義に辿り着くきっかけにはなっても、反出生主義を支持する理由そのものではないはずです。自身ではそれが理由だと思っている人がもしかするといるかも知れませんが、本当の理由を真摯に言語化してみればきっとそうではないことが分かります。これから生まれる者が人生で何を経験するのか、その経験からどれほどの苦痛を感じるのか、そもそも苦痛を感じる能力を持つのか、我々には絶対に分かりません。個々

の意識が持つこの構造的な無知を理解できていることが、支持の本当の理由なのではないでしょうか。

——反生殖主義を支える理論としては、どのようなものをお考えでしょうか。苦痛回避論や同意不在論など様々な考え方がありそうですが。

**古野** 快楽を与える義務と苦痛を与えない義務の非対称性が主なものになるでしょう。非存在ゆえ望んでもいないのに絶対に与えなければならない快楽というものは少なくとも私は思いつきませんが、絶対に与えてはならない苦痛は拷問やレイプや戦争など比較的容易に考えられます。現に生きている存在に対してさえ、何も対価を受け取っていないのならその存在に快楽を与えなかっただけではその不作為を罪にすることは出来ませんし、ましてや何も求めない非存在を存在に変えてわざわざ欲求を抱かせてそれを満たす必要はないのではないかと考えます。

**穂積** 無生殖協会の公式なものとして扱ってはいませんが、私自身はほぼ苦痛の定義だけに頼っています。「私は苦痛（純粹で自明な悪性を持つ主観的経験の質）を感じる能力を持つ意識である」という揺るがない事実、「私という意識は動物の身体に起きているらしい」という知覚の示唆、そして「動物のような物質の形態は意識を宿す可能性が高そうだ」という推論の3ステップが、苦痛を最小化するために新たなヒト／動物を生まないための活動をするべきだという主張の根拠として私には十分に機能しています。反生殖主義を否定しようとするれば私の苦痛に悪性がないと主張しなければならず、それは端的に誤りですしそもそも語義矛盾です。悪性を持たない主観的経験の質は苦痛とは呼べません。

——英語圏で活発に活動をしている反出生主義インターナショナルというグループがあります。無生殖協会は彼らとはどのような連携を今後考えておられますか？ また、日本独自の思想や、活動というものはあるのでしょうか？

**古野** 情報交換や対話やオンラインでのイベントに関わっていきたいと考えています。ANIは倫理的な反出生主義を掲げていますし、人間以外の動物の苦痛の減少も目的としていて無生殖主義の理念とも非常に近いものがありますので様々な場面で積極的に協力していきたいと思っています。

**穂積** 私は個人的に反出生主義インターナショナル（Antinatalism International／



ANI) の活動に参画していて、主に Discord サーバーの管理と『反出生主義者のハンドブック——よくある生殖の言い訳とその応答』の英日翻訳を担っています。ANIはこのハンドブックやポッドキャストなど、すでによくまとまった資料をインターネット上に公開しています。我々が無生殖協会として独自の資料を作る可能性は否定しませんが、せつかく ANI が作っているものがあるのですから、同種のことを乱立させるより既存のものを一緒に改良していくことに注力するのが得策でしょう。また ANI の重要な活動として、野生動物の苦痛に関する活動を行う団体の連絡先を集めたデータベース「ANImal Database」の作成もあります。無生殖協会は ANI の日本支部のように機能して、必要な情報を日本で集めて ANI に提供したり、逆に ANI の成果物を日本語に訳して日本語話者たちに届けたりすることができます。日本を含む世界全体の苦痛最小化活動が円滑に進むように、無生殖協会は ANI と日本の反出生主義者たちの窓口になることが可能だと思います。

——無生殖協会がいま直面している難しい問題としては、どのようなものがありますか？

**古野** 団体を運営した経験のないメンバーが多いのと、私自身が共同代表でありながらこうした経験や知識に乏しいのでこれからの運営に少し不安がありますが、熱意を持って様々な困難を乗り越えたいと思っています。

**穂積** この種の団体を設立することの目的として、共通の目的を達成するために異なるスキルを持ち寄ることで、個人の活動では不可能なことを可能にする、ということが言えると思います。しかし今はメンバーが 19 人しかおらず、活動の幅が制限されています。多様な活動を展開して結果を出すためにはもっとメンバーの数とスキルの種類を増やさなければならないので、知名度の向上が今の課題です。

——最後に、言い残したことや、読者に伝えたいことがあればおっしゃってください。

**古野** 無生殖協会は日本初の倫理的反出生主義(無生殖主義)の団体です。私たちは無生殖主義を広めて、世の中の苦痛を減らすことを目指しております。無生殖協会はそうしたことに関心がある方の協力を求めています。よろしければ当協会の HP や Twitter のアカウントにお越しください、無生殖主義についてもっと知ってみませんか？ また、ヴィーガンまたはヴィーガンになる予定かつ当

協会の規約に同意出来る方の入会も受け付けております。

**穂積** 我々が目指すのは、語義に最も忠実な意味での「悪くなり得ない世界の在り方」です。これをお読みになっているあなたに苦痛を感じる能力があるのか私たちには決して分かりません——あなたの身体の神経系の働きは外から観測できても、あなたのクオリアそのものは観測不能です——が、あるのならば苦痛の純粹で自明な悪性をきっと分かっていたはずです。その悪性がなければ苦痛はなく、苦痛がなければ問題と呼ばれるべきものは一つも存在しないこととなります。我々が皆様をお願いしたいのは、無限の可能性の分岐を初めから作らないことです。物質がヒトや動物の形をとることを容認してしまうと、その物質があなたのような意識を宿し、主観的な経験から快楽や苦痛を感じる可能性を生み出します。その意識は知覚内容としての世界を直接生きて、快楽を感じることもあれば耐えがたい苦痛を感じることもあるかも知れません。可能性は無限大です。しかし、物質がヒトや動物の形をとらないようにすれば、少なくともヒトや動物の意識として快苦を感じ得る主体は作られず、したがって苦痛の可能性が一切ないことが保証されます。

——反生殖主義について、議論が深まっていくことを期待しています。本日は、ありがとうございました。

2021年3月20日